



提灯学校(ちょうちんがっこう)

この言葉を知っていますか?『平成』も終わるといふのに、こんなのは死語がもしれません。今の時期はご多分にもれず、うちも職員室の灯りがいつまでもついています。教室なんかの場合は、遠くの方からも灯りが見えていることでしょう。年齢や経験に関係なく、仕事が山積みになっているのはどこの職場でも同じがもしれませんが、私(わたし)からも見えていても、『先生ら大丈夫...?』と心配になってしまいます。



実は教育現場にも、『働き方改革』の大きな波が押し寄せています。和歌山市では出勤を記録するPCが導入され、月ごとに集計し超過勤務の有無の確認とその指導をすることが、校長の責務のひとつとなっているのです。当然、仕事や会議の軽減・削減・合理化を進めることも、そして教職員に帰宅を促すことも校長の責務。熱意と誠意をもって仕事に打ち込んでいるその姿を眺めながら、時代の流れや要請と現実の狭間に悩む私であります。

毎日毎日帰りが遅くて、休みの日にも出勤して、かまっしてほしいときに家にはいなくて、疲れ果てている姿を見てばかり…と、実は教師の子は、同じ仕事に就かないことが多いと聞いたことがあります。心身ともに健康な子供を育てるのに、担任が心身ともに不健康だとえらいことです。そう考えると、適正な勤務時間を維持することは、本当に必要不可欠なことだと思います。



自身の経験を語ります。紀の川市・岩出市ですずっと勤務して、教頭でこの四箇郷小学校に赴任してきたのが10年前。何も知らず何も分からず、段取りも当然できず、知り合いも顔見知りもおらず、当然土日はフル出勤。平日の夜の12時をすぎても仕事が済まない

こともありました。朝来た時、校舎が見えたとき胸が悪くなり、空嘔(からえずき)を何回したことが。そんなことがついこの前のように思い出されます。

そんな状況でも、徐々に教頭の仕事にやりがいを感じるようになってきました。知らないこと知り、できないことができるようになり、自分の仕事の引き出しが増えることに喜びを感じるようになってきたからです。でも、それよりも何よりも、保護者や地域が広い心と温かい目をもって、経験のない者をじっくり育ててやるという雰囲気が、この四箇郷にあったから乗り切れたと感謝しています。それは、後でわかったことですがね。



時間が解決してくれます。教師にとって一番ストレスを感じるのは…、言わずもがなですね。とすると、四箇郷に赴任してきた若い先生は、ラッキーがもしれません。少なくとも私はそう思っています。